

<研究ノート>

ゲーテ『若きヴェルターの悩み』改訂版手稿（1786年）における句読法

Interpunktion in der Handschrift von Goethes „Leiden des jungen Werthers“ (1786)

宮谷 尚実

MIYATANI Naomi

ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ『若きヴェルターの悩み』改訂版（1787年）の手稿（*Leiden des jungen Werthers*, 1786年）は現在ヴァイマルのゲーテ・シラー文書館（GSA）が所蔵している。ゲーテやヨハン・ゴットフリート・ヘルダーらによって手稿に書き込まれた校正指示から、改訂版においてダッシュやセミコロンの使用が顕著に増えた校正指示の痕跡が明らかになった。ルゼルクによるこの手稿の校訂版（1999年）本文は校正指示をすでに反映した状態であり、句読法上の変更に関しては巻末の注釈でもほぼ言及されていない。句読符号にかかわる校正指示によって改訂版の当初の手稿よりも呼吸や区切りの表現が豊かになった背景には、ヘルダーの深い関与が想定されうることが文書館での閲覧によって確認できた。

キーワード：ゲーテ、『若きヴェルターの悩み』、句読法、ダッシュ、セミコロン

0. はじめに

18世紀ドイツ語圏における句読法に関する研究の一環としてヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ（Johann Wolfgang Goethe, 1749～1832年）の書簡体小説『若きヴェルターの悩み』（以下、『ヴェルター』）の初版1774年と改訂版1787年を比較したところ、改訂版において句読法関連の符号が顕著に増加していた⁽¹⁾。多感な主人公ヴェルターの激しい感情を表すためにダッシュや感嘆符が多用された背景には、5歳年下のゲーテにイギリス文学への橋渡しをしたヨハン・ゴットフリート・ヘルダー（Johann Gottfried Herder, 1744～1803年）の存在があり、初版のみならず改訂版でもヘルダーの影響が推測されるものの、改訂版の校正を具体的に跡づける必要があった⁽²⁾。改訂版「手稿」の校訂版⁽³⁾が1999年に出版されてはいるが、ファクシミリ版ではなく活字化されたものなので、校正箇所については巻末の注釈を手がかりとするほかなかった。そこで、今回は2022年8月にヴァイマルのゲーテ・シラー文書館（GSA）で改訂版のための筆写原稿を閲覧し、ゲーテやヘルダーらがどこした校正指示を詳細に確認してきたので、本稿ではその調査結果をまとめた。

1. 『ヴェルター』初版と改訂版の異同

『ヴェルター』の初版を底本とした日本語訳の解説

で、訳者でもある神品芳夫は、初版と改訂版の異同を指摘している。そのなかで、初版は「未完成」で改訂版によって完成形になったとする考え方に対し、「改訂の骨子は主としてケストナーのような当事者の立場に対する配慮やヘルダーのような先輩の助言から出たものであって、構成にも表現にも厚みができたが、その代りに刺激性が和らげられてしまったのも事実」⁽⁴⁾だと述べている。語りの「烈しい勢い」をなくしたり「荒ら削りな語句を和らげられしにしたりする変更をほどこされた改訂版『ヴェルター』は「表現形態から見れば、もはやシュトゥルム・ウント・ドラングの作品ではなくなっている」⁽⁵⁾と評する。

改訂版への変更に際して、シュトゥルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）に特有の「若さ、創意、生々しく力強い言葉」⁽⁶⁾を和らげ、あるいは「矯め」たり弱めたりしてしまったのはヘルダーが原因だとすると、具体的に彼はどのようにテキストに手を加えたのだろうか。

2. 『ヴェルター』改訂版手稿の成立事情

1774年に出版された『ヴェルター』初版（*E*¹）は1775年にかけて5回以上重版された。その後、誤植等が訂正されたもののその校正にゲーテ自身は関わっていないと思われる初版修正版（*E*²、1775年初頭）を

経て、第1巻と第2巻それぞれの表紙に新たに4行詩を添えた⁽⁷⁾、ゲーテの公認版である「真正第2版」(E^3 、1775年)が出版される。この E^3 に基づいた海賊版であるヒンブルク版(厳密には、おそらくその重版のうちのひとつである h^3 、1779年)から改訂版手稿(H)は作られた。ゲーテが『ヴェルター』の改訂を意識しはじめたであろう1781年の年末時点で、 E^1 から E^3 の版は彼の手元になかったという。ゲーテは校正作業の際もヒンブルク版(h^3)を参照したと考えられている⁽⁸⁾。

3. 『ヴェルター』改訂版手稿

改訂版手稿(H)は美しく製本された状態でゲーテ・シラー文書館に所蔵されている。白い革の背表紙に、薄い紫色の背景でタイトルが記され、表紙にはマープル模様の上質な紙が用いられている。手に取っただけで、極めて大切に扱われ、保管されてきたことが伝わってくる⁽⁹⁾。表紙裏に貼られた紙には、ザクセン＝ヴァイマル＝アイゼナハ大公妃ゾフィー(Sophie von Oranien-Nassau、1824～1897年)が1890年代に宮廷製本家にこの手稿の製本をさせたことが記録されている。

この手稿はゲーテ自身が手書きしたのではなく、フィリップ・フリードリヒ・ザイデル(Philipp Friedrich Seidel、1755～1820年)が多くの部分をおそらく h^3 から筆写し、残りはクリスティアン・ゲオルク・カール・フォーゲル(Christian Georg Karl Vogel、1760～1819年)が担当している。そこにゲーテとヘルダーを始めとした、5人あるいは5種類のインクで校正指示がなされたと推測されている⁽¹⁰⁾。単語や文を書き換えたり追加したりといった校正作業はゲーテの手になるものが多いが、ヴァイマル版ゲーテ全集の解説は「ヘルダーが正書法(Orthographie)と句読法(Interpunction)を整えた」と断言している⁽¹¹⁾。

この手稿から校正刷が作成され、さらなる校正を経て改訂版の出版へと至る⁽¹²⁾。その点では、本稿で扱う改訂版手稿は改訂版へと至るまでの一段階にすぎないが、その校正指示からは、この手稿段階の句読法の特徴が見えてくるはずである。

改訂版手稿の校正作業が行われていた時期にゲーテがシャルロッテ・フォン・シュタイン(Charlotte von Stein、1742～1827年)に宛てて書いた手紙には、ヘルダーに関する記述がある。

ヘルダーはヴェルターをよく感じ取って(sentirt)

いて、構成(Composition)がうまくいって(just)いないところを正確に見つけてくれます⁽¹³⁾。

グリムのドイツ語辞典によれば⁽¹⁴⁾、18世紀に限定的に用いられたsentierenという動詞はempfinden、fühlenなど「感じる」、wahrnehmen「知覚する」「気づく」などの意味だが、フランス語のsentirに由来するため、嗅覚や触覚による体感的知覚spüren「感じる」に近い表現である。ここで「構成」と訳したCompositionはグリムの辞書にも他の当時の辞書にも見出し語がなく、名詞の頭文字にKでなくCが用いられていることからフランス語的表現で、「構成」だけではなく、「作文」の意味も含まれうると解釈できる。そうであれば、ヴェルターの感情を汲み取ったうえで表記を含む文章上の不備を指摘しうる存在として、ヘルダーのことをゲーテは評価していたということになる。

同じくシュタイン夫人に宛てたゲーテの手紙に、ヘルダーが1786年8月下旬に改訂作業に関わっていたことがわかる記述がある⁽¹⁵⁾。一方で、ヘルダーの書簡全集⁽¹⁶⁾で1786年6月から8月にかけて書かれた手紙を調べたが、ヘルダー自身による『ヴェルター』改訂手稿(H)の校正に関する記述を見つけることはできなかった。

4. 改訂版手稿における句読法の校正指示

改訂版手稿(H)⁽¹⁷⁾をゲーテ・シラー文書館で閲覧して確認できた句読法に関する校正指示を表にまとめると以下の通りになる。

校正指示の内容	箇所数
ピリオド(.)の削除	1
アポストロフィ(')の追加	2
括弧(())の追加	6
コンマ(,)の削除	6
ピリオド(.)の追加	11
コロン(:)の追加	18
疑問符(?)の追加	21
コンマ(,)の追加	43
セミコロン(;)の追加	43
感嘆符(!)の追加	44
ダッシュ(—)類の追加	64

【表 改訂版手稿(H)の句読法関連校正指示】

句読法の校正に関する指示のなかで64箇所と圧倒

的に多いのはダッシュ類の追加である。ダッシュ「類」としたのは、手稿を見ると線が行の中央ではなく下部に記されたケースが12箇所あったからだ。活字として印刷された段階ではすべてダッシュになっているのでダッシュ類としてまとめた。行の下部に記された線が意識的に行の中央のダッシュと区別されたかどうか、線の位置に意味があるかどうかは考察の対象外とした。

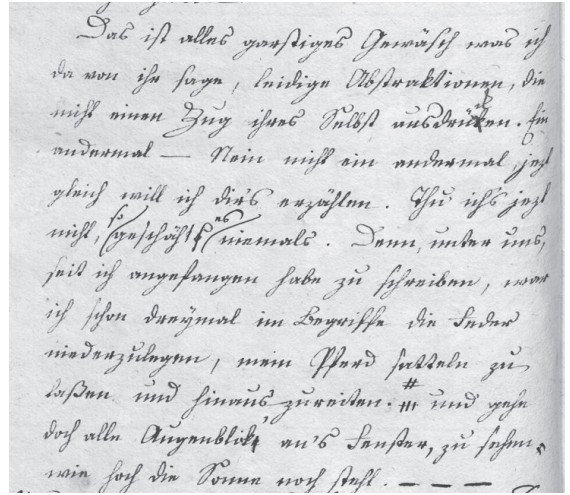
次に多いのはピリオド等から感嘆符への変更で44箇所、それに続くのはコンマの追加43箇所、セミコロンの変更や追加も43箇所ある。

改訂版手稿（H）の校訂版（1999）で编者ルゼルケは文言上の校正指示については詳細に註記しているが、これらの句読法上の校正指示についてはあまり注意を払っていない。たとえば64箇所もあるダッシュ類の追加の校正指示のなかで、校訂版で註記されているのは13箇所⁽¹⁸⁾にすぎないことから、句読法への関心の低さは明らかである。またヘルダーが校正に関わったことは認めつつも⁽¹⁹⁾、句読法に関する註記でヘルダーへの言及はみられない。

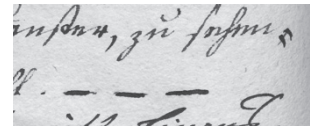
ヴァイマル版では、初版（E¹）から始まりゲーテ自身による最後の版（C、1828年）までの異同をかなり網羅しているが、この異同リストの編集方針として「耳に聞こえない正書法的なものや複合語（Composita）の結合や分離、h³に多く見られるアポストロフィには言及しない」⁽²⁰⁾としていることから、音声として聞こえない句読法上の変更には文言上の変更と比べてヴァイマル版でも注目されていないことがわかる。改訂版手稿（H）における句読法上の変更はゲーテではなくヘルダーの手になるものとみなしたことも、あるいは影響しているのかもしれない⁽²¹⁾。

4.1 ダッシュ類の追加例

ダッシュ類の追加に関して、改訂版手稿（H）の校正指示の書き込みに特徴的なのは、それらが他の部分のインク色（セピア色がかった焦げ茶）とは明らかに異なり、黒インクで線が他よりも目立って太いことである。図1⁽²²⁾の右下を拡大するとより明らかだろう。



【図1】Foto: Klassik Stiftung Weimar, GSA 25/W 2006



直前のピリオドと同じくらいに低い位置に黒い太線が3本連続してひかれている。さらに細かく観察すると、一番左の線は焦げ茶の細い線の上に書かれているため、校正前はピリオドの後に1本だけ下線（ ）がひかれていた可能性がある。試しにヒンブルク版（h¹）を見ると、ここにはピリオドしかない⁽²³⁾ので、改訂版手稿（H）の最初の段階では1本ひかれていたと思われる下線が、この黒い太線によって3本に増やされている。

このダッシュ的な線の追加により「沈黙の時間」が増やされたのは、『ヴェルター』第1部の6月16日付のヴェルターが友人に宛てた手紙の一部だ。ロッテに恋心を抱いたばかりのヴェルターが、ロッテに会いに行こうかどうしようか逡巡している様子を自分で述べている部分である。下線のままで訳してみる。

ここだけの話だが、この手紙を書き始めてからもう3度も、ペンを描いて、馬に鞍をつけるように命じて、駆け出してしまおうと思った。でもやっぱり今朝は馬を乗り出すまいと心に誓う。でも日がどのくらいの高さになっているかを見に、しょっちゅう窓辺に行ってしまうんだ。———やっぱり我慢できず、彼女の家に行ってしまった⁽²⁴⁾。

線が1本であるよりも、3本のほうが長時間にわたって深く迷い続けるヴェルターの様子が強調され、

「やっぱり我慢できず」ロッテに会いに行ってしまう行動との対比が明確になる。改訂版手稿（H）から作られた校訂版を含め、印刷される際には、この下線（ ）は通常のダッシュ（—）で活字化されている。

このような明らかに太い黒インクによって、改訂版手稿（H）のダッシュ類の追加のうち多数が行われていた。上記の箇所に関してヴァイマル版の註ではゲーテに帰すると推定される記号 *g* を付している⁽²⁵⁾が、同じページのゲーテ自身による書き込みよりもさらに線が太いことや、ゲーテとは異なるより力強い筆致であること、そして句読法に関してはヘルダーが担当していたという前提、以上を総合すると、改訂版手稿（H）におけるダッシュ類への変更や追加の多くはヘルダーによる校正指示である可能性が高い。

4.2 セミコロンの追加例

改訂版手稿（H）の句読法に関して追加が目立った符号のうちのひとつとして、セミコロンも挙げておきたい。日本語の『標準 校正必携 第8版』は「約物・記号・符号（非漢字）の名称」のリストを横組み部分に置いている。セミコロンは「区切り記号」のひとつとして挙げられており、「切れ目の比重」が「コンマ→セミコロン→コロ→ピリオドの順」と説明されている⁽²⁶⁾。また現代ドイツ語の句読法ハンドブックではセミコロンの使用法が次のように要約されている。

セミコロンは「線点（Strichpunkt）」とも呼ばれ、コンマとピリオドの中間の位置を占める。コンマでは区切りが弱すぎる箇所ではコンマの代わりに置かれるが、ピリオドでは強すぎる箇所ではピリオドの代わりに置かれる。それがどのような場合に起きるか、はっきり述べることはできない。それゆえ、他の符号と比べてセミコロンは書き手が自由に使える⁽²⁷⁾。

18世紀のアーデルングは、ドイツ語文法書で次のようにセミコロンを説明している。

§ 81. セミコロンは、一部は、文の数個の成分がある程度長くて、その結果、コンマだけでは、明確さを保証できない場合、また一部は、連続的な、相反的な、説明的な、推論的な、排除的な、除外的な、そして比例的な文の後置文を前置文から区別するとき。しかし、それらの文がある程度

長い場合だけである⁽²⁸⁾。

文あるいは文成分が「ある程度長い」場合、前の文から明確に区切るための符号としてセミコロンが用いられたということだが、この「ある程度」の長さや、「明確」かどうかの判断は、書き手の自由に委ねられる。そのことは18世紀も現在も、ドイツ語でも日本語でも変わりはないようだ。言い換えれば、音読する際の呼吸、あるいは息継ぎの長さにかかわる問題であり、最初の文に続く「ある程度長い」文要素や後続の文を「明確に」区切りつつも全体としてワンフレーズにしたい場合に、このセミコロンを用いるということだろう。確かに、シュトゥルム・ウント・ドラングの激烈な文体にはこのような繊細な区切りはそぐわず、単文ごとに叩きつけるような文のリズムがふさわしい。感情を息長く表現しつつ、ふと一瞬わずかにアーティキュレーションが挟まれる、これもまたどちらかといえども感様式のリズム感ではないだろうか。

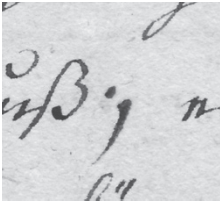
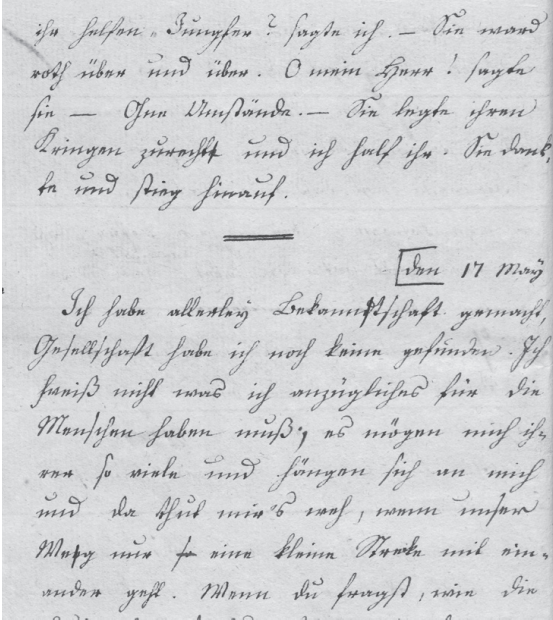
このセミコロンの追加もまた、ダッシュ類の追加と同じく黒く強い太線で記された校正指示が多く、閲覧によって確認できただけで全43箇所のうち少なくとも10箇所ある。このセミコロンの追加に関してはゲーテ自身の校正指示だと確定されているものも2箇所ある⁽²⁹⁾。そのゲーテの校正指示と黒く強い太線は筆致が異なっていることから、これもヘルダーの校正指示と推測してよいのではないだろうか⁽³⁰⁾。

次の図2⁽³¹⁾には、大きな画像で下から5行目にあるセミコロンを拡大した画像を添えた。これは『ヴェルター』の物語のなかでは、ロッテと知り合う以前の5月17日付の手紙の一部である。ヴェルターは友人への手紙で新たな土地での人々との交流について報告している。原文のセミコロンをそのまま入れて訳すと次のようになる。

あらゆる人と知り合ったが、仲間といえるような人はまだ見つからない。僕にはわからない、僕が持つ人を引きつけるようなものとは何なのか；多くの人が僕を好いて慕ってくれるが、それは僕を苦しめるだけだ、僕らの歩む道が一緒なのはほんのわずかなのだから⁽³²⁾。

知り合いは多くできても、ヴェルターは心を許せる人を見つけれないで悩んでいる。ヴェルターの自分に対する否定的な感情と人々から寄せられる肯定的な感情に関する発言が、セミコロンをはさんで繰り返され

る。(A) 自分への疑念（「わからない」）(B) 人々からの好意（「人を引きつけるようなもの」）(B') 人々からの好意（「好いて慕ってくれる」）(A') 自分の否定的感情（「苦し」い）と、セミコロンを挟み、鏡像のように大きなフレーズが構成されている。



【図2】Foto: Klassik Stiftung Weimar, GSA 25/W 2006

ゲーテ・シラー文書館に依頼して高解像度でデジタル化してもらった画像から、このセミコロンの校正指示が他の文字に比べて太いという特徴や筆致が異なるということまでは目視で判断できる。しかし、上の点と下のコンマ形の部分が明らかに違うインクで記されていることまでは鮮明にならない。カラー画像では焦げ茶にしか見えないインクの色を文書館の閲覧室の机でライトとルーペを用いて見ると、より力強いコンマ形の部分のみが黒インクだった。これは上記のダッシュの部分で見たインクの色と同様である。つまり、改訂版手稿（H）でダッシュを加えるよう校正指示したのと同じ人物がこの部分をセミコロンに変更した可能性が高い。もちろん、インクの成分分析など科学的なアプローチがなければ断定的なことは言えないが、現物の目視でも判別可能なほどインクの色やその相違

は明らかである。現在、多くの図書館でデジタル化を促進していることでさまざまな貴重書へのアクセスが容易になったとはいえ、細部の研究には現地での調査が不可欠であることをあらためて実感した。

5. おわりに

改訂版は「シュトゥルム・ウント・ドラングの作品ではもはやなくなっている」と評されているが、「平板化」に歯止めをかけ、多感様式の手法で感情表現を保持あるいは強調しようとしたのは、やはりヘルダーの功績ではないだろうか。単語や文レベルではなく、文の息づかい、呼吸やポーズにかかわる句読符号をヘルダーが活用したため、翻訳ではこの効果を十分に反映することは困難である。特に、セミコロンを日本語訳に反映させることは実に難しい。今後、セミコロンに関してその使用法の歴史や翻訳可能性を含めた研究を進めていきたい。

註

- (1) 宮谷（2022）。
- (2) 同上、134ページ。その後の確認で、ゲーテ自身による手稿ではなく、筆写させた原稿をゲーテらが校正し、指示を書き込んだものであること、またこの筆写原稿を製本したものがヴァイマルのゲーテ・シラー文書館に所蔵されていることがわかった。
- (3) Goethe, Johann Wolfgang: *Leiden des jungen Werthers*. Edition der Handschrift von 1786. Hrsg. v. Matthias Luserke, Weimar (Verlag Hermann Böhlaus Nachfolger) 1999.
- (4) ゲーテ（2003）、465ページ、訳者である神品による解説。送り仮名は原文のまま。
- (5) 同上、466～467ページ。
- (6) ゲーテ（2015）、735ページ、編者である大宮による解説。大宮訳は『ヴェルター』の改訂版を底本としているが、シュトゥルム・ウント・ドラングの特徴をあえて際立たせる日本語訳が試みられている。
- (7) 手元で確認できる日本語訳でこの四行詩を本文に訳出しているのは、柴田訳のみであった。ゲーテ（1991）、15ページ（第1巻）、60ページ（第2巻）。
- (8) Goethe (1899), S. 331. この段落でまとめた『若きヴェルターの悩み』の初版手稿から改訂版以降の様々な版の詳細は、ヴァイマル版全集第19巻307ページ以下を参照。
- (9) 数年前までは、手稿に皮脂等が付着することを避けるために文書館や図書館の貴重書室で閲覧の際に手袋の

着用が求められていたが、最近は逆に手袋の繊維が紙を傷めるという理由から、素手で作業するように指示された。

- (10) Goethe (1899), S. 331.
 (11) 同上。
 (12) 校正刷の段階でも、ゲーテは校正指示を採用すべきかどうか迷ったときにはヘルダーの助言を求めたようだ。Goethe (1899), S. 334 f.
 (13) ゲーテからシュタイン夫人に宛てた1786年7月6日付の手紙。Goethe (1899), S. 328に基づく。
 (14) Grimm (1905), Sp. 614.
 (15) シュタイン夫人宛、1786年9月1日付の手紙、「ヘルダーがそれ [= 厳密には『ヴェルター』の結末部分] を何日間か携行し／心のなかで温めていた (herumgetragen) 後に [...]」。Goethe (1899), S. 329.
 (16) この少し前、ヘルダーがゲーテの戯曲『鉄の手のゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』(*Götz von Berlichingen mit der eisernen Hand*, 1773年) を校正したという記述はあるが、『ヴェルター』に関しては言及が見あたらない。Vgl. Herder (1979), S. 182.
 (17) Goethe, Johann Wolfgang: *Leiden des jungen Werthers*. Signatur des Goethe- und Schiller-Archivs GSA 25/W 2006 (Erstes Buch) sowie GSA 25/ W 2007 (Zweytes Buch), 以下 *H*.
 (18) Goethe (1999), S. 26, Anm. 2; S. 57, Anm. 13; S. 58, Anm. 5 und 7, S. 71, Anm. 6; S. 81, Anm. 4; S. 88, Anm. 18; S. 91, Anm. 26; S. 93, Anm. 17; S. 96, Anm. 2; S. 98, Anm. 20; S. 112, Anm. 7 sowie 22.
 (19) Goethe (1999), S. 132.
 (20) Goethe (1905), S. 352.
 (21) たとえば *H* でダッシュが追加されていることがヴァイマル版の異同リストに掲載されていない例としては、雨上がりにはロッテがヴェルターの手に分の手を重ねて「クロブシュトック」と言ったその有名な台詞の前後のダッシュ。ヴァイマル版本文にはダッシュが用いられている。Goethe (1905), S. 36.
 (22) *H*, GSA 25/W 2006, Bl. 18r (= S. 52), Goethe (1999) S. 22, Z. 5.
 (23) Goethe (1775), S. 28.
 (24) ゲーテ (1991)、柴田訳26ページでは「ひっきりなしに窓際へ行って太陽の傾き加減を見、まだ遅すぎはしないぞと考えている……。」と3点リーダーを連続させて3つのダッシュを反映させている。
 (25) Goethe (1899), S. 362. 本文は S. 24, Z. 25にあたる。
 (26) 『校正必携』(2017)、292ページ (= 横書き (19) ページ)。

(27) Duden (2014), S. 178. セミコロンに関する記述は他の符号や記号類と比較して目立って少なく、見開き1ページしかない。

- (28) アーデルング (2017)、430ページ。
 (29) Goethe (1999), S. 28, Z. 26 und Anm. sowie S. 59, Z. 27.
 (30) Goethe (1899), S. 362. 本文は S. 11, Z. 22にあたる。
 (31) *H*, GSA 25/W 2006, Bl. 7r (= S. 24), Goethe (1999) S. 13, Z. 19.
 (32) ゲーテ (1991)、柴田訳19ページは「自分自身に人々の心を引きつけるに足るところがあるとは信じ難いのだが、多くの人々が僕を好いてくれ、僕に愛着を持ってくれる。が、それが僕を苦しめる。」と、セミコロンにあたる部分を読点 (,) で区切っている。

参考文献

- Goethe, Johann Wolfgang: *D. Goethens Schriften*. Erster Theil. Berlin (Christian Friedrich Himburg) 1775. この版はアンナ・アマーリア図書館のサイトからデジタル版で確認できる。
https://haab-digital.klassik-stiftung.de/viewer/image/1764251172/2/LOG_0003/
 (最終アクセス2022年9月18日)
 Goethe, Johann Wolfgang: *Leiden des jungen Werthers*. (Handschrift=*H*) Signatur des Goethe- und Schiller-Archivs GSA 25/W 2006 (Erstes Buch) sowie GSA 25/ W 2007 (Zweytes Buch).
 Goethe, Johann Wolfgang von: *Goethes Werke*. Herausgegeben im Auftrage der Großherzogin Sophie von Sachsen. 19. Band. Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger) 1899. (= ヴァイマル版全集)
 Goethe, Johann Wolfgang: *Leiden des jungen Werthers*. *Edition der Handschrift von 1786*. Hrsg. v. Matthias Luserke, Weimar (Verlag Hermann Böhlau Nachfolger) 1999.
 Grimm, Jacob und Wilhelm: *Deutsches Wörterbuch*. Leipzig (S. Hirzel), Bd. 10, 1, 1905.
 Herder, Johann Gottfried: *Briefe*. Bd. 5. Unter Leitung von Karl-Heinz Hahn, herausgegeben von den Nationalen Forschungs- und Gedenkstätten der klassischen deutschen Literatur in Weimar (Goethe- und Schiller-Archiv), bearbeitet von Wilhelm Dobbek und Günter Arnold, Weimar (Hermann Böhlau Nachfolger), 1979.
 ゲーテ「若きヴェルテルの悩み」柴田翔訳、『集英社ギャラリー [世界の文学] 10 ドイツ I』(集英社) 1991年、11～120ページ。

『ゲーテ全集 6 新装普及版』神品芳夫他訳（潮出版社）2003年。

Duden Ratgeber. Handbuch Zeichensetzung. Bearbeitet von der Dudenredaktion. Berlin (Dudenverlag) 2014, 2., aktualisierte und überarbeitete Auflage. (=Duden)

『ゲーテ』大宮勘一郎編（集英社）2015年。

ヨハン・クリストフ・アーデルング『ドイツ文法 18世紀のドイツ語』川島淳夫訳（I P C 出版センター・ビプロス）2017年。（1781年にベルリンで出版された *Deutsche Sprachlehre* の日本語訳。）

日本エディタースクール編『標準 校正必携 第8版』（日本エディタースクール出版部）2017年、第8版第4刷。

宮谷尚実「18世紀ドイツ語圏における句読法とその翻訳可能性（3）ゲーテのいわゆる『ウェルテル』における句読法」国立音楽大学『研究紀要』第56集、2022年、127～137ページ。

図版

Goethe, Johann Wolfgang: *Leiden des jungen Werthers*. Signatur des Goethe- und Schiller-Archivs GSA 25/W 2006, S. 24 und 52. Für die freundliche Publikationsgenehmigung der Digitalisate bedanke ich mich herzlich beim Goethe- und Schiller-Archiv.

本研究は JSPS 科研費19K00527の助成を受けたものです。